



Title	「イーゴリ軍遠征の物語」考
Author(s)	岩崎, 兵一郎
Citation	大阪外国語大学学報. 1952, 1, p. 194-196
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80093">https://hdl.handle.net/11094/80093</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「イーゴリ軍遠征の物語」考

岩 崎 兵 一 郎

On Slovo o polku igorevie

「イーゴリ軍遠征の物語」1800年第一版第一項



С Л О В О

П Ъ С Н Ъ

О ПЛЪКУ ИГОРЕВѢ, (а) О ПОХОДѢ ИГОРЯ,  
ИГОРЯ СЫНА СЫНА СВЯТОСЛАВОВА,  
СВЯТЪСЛАВЛЯ, ВНУКА ОЛЬГОВА.  
ВНУКА ОЛЬГОВА.

Не лѣлоли ны бѣшетѣ, бра-  
те, нагати старыми сло-  
еесы трудныхъ повѣстей о  
лѣлку Игоревѣ, Игоря  
Святѣславляга! нага-  
ти же ся тѣи лѣсни по

Пріятно намѣ, братцы, на-  
чать древнимъ слогомъ при-  
скорбную повѣсть о походѣ  
Игоря, сына Святославова!  
начать же сію пѣснь по бы-  
тіямъ того времени, а не по

---

(а) Игорь Святославичъ родился 15 Апрѣля 1151 года; во Святомъ Крещеніи нареченъ Георгіемъ; женился въ 1184 году на Княжнѣ Еофрозиніи, дочери Князя Ярослава Володимировича Галицкаго. Въ 1185 году имѣлъ онъ сраженіе съ Половцами, а въ 1201 году скончался, оставивъ послѣ себя пять сыновей.

ロシア民族が誇としているロシア最古の叙事詩「イーゴリ軍遠征の物語」(Slovo o polku igoreve)は、ロシア文學史上燦然と輝いている。この物語の原作者は判然としていないが、學識のある、天分豊かな詩人で、当時のロシア内外の口碑文學並に記述文學に通暁していた。一説にはイーゴリ軍親兵隊の高官であつたと信ぜられている。物語が書かれたのは、1185年から1188年の間で、大体ドイツの運命悲劇の叙事詩「ニーベルンゲンの歌」が完成された直前の時代である。

物語の寫本が発見されたのは、ずつとおくれて1795年のことであつた。当時のロシア美術院長 A. I. Musin-Pushkin (1744—1817) は古文書蒐集家として知られていたが、偶然の機會から、スパソヤロスラフスキー修道院で入手した「年代記 No. 323」と書かれた古文書の中から発見したのであつた。寫本は光澤紙にかなりきれいな筆蹟で書かれていた。寫本は発見地 Yaroslavl から、Peter-burg へ送られて古文書研究家達に披露された。Ekaterina 女帝 (1762—1796) も、この寫本に關心を拂い、女帝の希望で寫本の再寫本が作られた。一方、Musin-Pushkin, Malinofsky 及び Bantnish-Kamensky の三氏の細心の編輯によつて、1800年この物語がはじめて刊行された。最初に発見された寫本が惜しくも 1812 年の マスクヴァ 大火のため焼失したため、1800年刊行のものが唯一無二の完全な原典となつた。

この原典第一版には次の長い題名がつけられている。「ノヴゴロド、セーヴェルスキーの封建領主イーゴリ、スヴァトスラーヴィチがポーロフツィ族に對して起した遠征の史詩、12世紀はじめ古代ロシア語で書かれたもの、現用語に書き改めたものを併記する本史詩に掲げられたロシア大侯達の系圖をも附記する」。

この物語の原寫本が発見された時より二年後の1797年10月號のハンブルグ雑誌 Spectateur du Nord 紙上で、ロシア史家 N. M. Karamzin (1766—1826) によつて、本物語の発見が紹介されているのは、大いに興味深いものがある。

「イーゴリ軍遠征の物語」は寫本発見以來ずつと今日に至るまで、ロシアに於ては、文學史、ロシア語史の觀點のみならず、あらゆる分野の人々によつて研究されている。Leningrad 大學をはじめ、各大學でこの物語の講義が行われている。1938年ソヴェト連邦に於て、本物語七五〇年記念行事が催された。

次に原寫本に書かれていた古代スラヴ語のことばは、古代ブルガリヤ語より移行して、12世紀乃至13世紀のロシア國民詩のことばに非常に接近している。古代史譚(builina)、年代記(letopis)、經典外聖書(apokrif)のことばに近い。故 A. A. Shakhmatof 教授は古代ブルガリヤ語の文獻と主張していたが、現學士院會員 S. P. Obnorsky 教授を含めて、大多數のロシア語學者は

古代ロシア文章語の文獻であると認めている。

さて、物語の筋は南露キーエフの西北に位するノヴゴロド・セーヴェルスキーの侯イーゴリが勇氣にはやつて、弟フセワロド、甥スヴァトスラフ、實子ウラジーミルを併い、大軍を引率して、1185年4月23日出陣、當時南露ステップ地方を荒し廻っていたポーロフツィ族（チュルク民族）征討に向つたが、反つて大敗を蒙り、終に捕虜となるが、身を以て脱走辛うして歸國する。

神秘的美しさを以て表現されているこの最古の藝術作品はその内容より次の四部に分たれている。

### 第一部

イーゴリ軍出陣。吟誦詩人バヤンに對する呼びかけ。弟フセワロドと對面。ステップ地方進撃。天地闇黒（日蝕）、鳥の聲、野獸の叫びで表示される。凶兆ポーロフツィ軍との第一回の交戦。ボ軍の敗北。第二回の交戦。イーゴリ軍の大敗。戦闘の詩的描寫。ロシア軍の不運に對する草、木、大地のなげき。イーゴリ侯敵の捕虜となる。ロシア國土の荒廢の原因となつた諸侯の内讒。

### 第二部

キーエフ大侯スヴァトスラフの夢。貴族達の夢判断。スヴァトスラフの黄金の言葉。榮ありし過去のロシア國土の回想。イーゴリ軍敗戦の復讐とロシアの名譽恢復のため諸侯の叛起を促すことば。

### 第三部

イーゴリ侯妻ヤロスラーヴナ、ブチーヴリ城壁で歸らぬ夫の身の上を案じて泣く。

### 第四部

イーゴリ侯敵陣より脱走。ポーロフツィ汗の追跡。イーゴリ侯無事歸還。諸侯、親兵達に對する讚辭。

原作者の非凡な才能は詩の一行一行に光り輝いている。そして全篇をうちつらぬいている國土統一の思想は、原作者が威大なる愛國者であることを明示している。

「イーゴリ軍遠征の物語は我々の古代文學の砂漠にそびえる高塔である」プーシュキン。

「異教分子が強くにじみ出ているが、全篇キリスト教英雄主義性質を帯びている」カルル・マルクス。